



# スキントピック 症例報告

## ▶ スキントピックを併用しロキベトマブとステロイド点耳の減薬が可能となった犬アトピー性皮膚炎（アトピー耳炎）のゴールデン・レトリバーの1例

執筆：内山美緒 先生 大阪動物医療センター

監修：今井昭宏 先生 JASMINE どうぶつ総合医療センター 皮膚科・耳科担当、アジア獣医皮膚科専門医

小動物診療において皮膚疾患は最も来院数の多い疾患であり、なかでも犬アトピー性皮膚炎（canine atopic dermatitis、以下CAD）は、common diseaseとして知られ、外耳に生じたものをアトピー耳炎（atopic otitis、以下AO）と呼称されている。AOは、既存のCAD治療薬にて治療しているにもかかわらず、再燃をくり返し、重症化するケースも少なくない。

CAD（とAO）の治療には、永続的管理が必要不可欠であり、薬剤の副作用や経済的負担などを懸念する飼い主も多い。近年、Spectrum of careとして、利用可能なエビデンスに基づく医療を考慮しつつ、飼い主の期待と経済的制約に応じて、受け入れ可能な幅広い治療の選択肢を提供することが問われている。その選択肢の1つとして、サプリメントや食事により減薬を目的とした「体に優しい管理」を希望する飼い主がしばしば来院される。本症例ではスキントピック（ロイヤルカナン ジャポン）を併用しロキベトマブとステロイド点耳の減薬が可能となったCAD/AOの症例について報告する。

### 📖 症例のプロフィール

ゴールデン・レトリバー、3歳5ヵ月齢、去勢雄  
**主訴**：四肢と両耳のひどい痒みを伴う紅斑、毎年季節性（春から夏）に悪化  
**病歴**：11ヵ月齢で四肢端の掌側面に痒みを伴う紅斑を呈し、1歳で近医を受診、CADと診断され、オクラシチニブ、ロキベトマブ、モメタゾンフランカルボン酸エステル等で加療。冬季は痒みが落ち着いて休薬可能になるが、春に両耳と四肢端の強い痒みが再燃しプレドニゾロンおよびロキベトマブの投薬を再開した。飼い主は永続的管理が必要ならば、より長期的に負担の少ない治療方法を希望されたため当院皮膚科を受診した。

### 📖 これまでの経過

- 第1病日（2024/5/2） pVAS：7（図1）  
スキントピック開始  
ロキベトマブ30mg + プレドニゾロン20mg 1T SID 7日
- 第28病日（2024/5/30） pVAS：1.5（図2）  
良好に維持できておりロキベトマブ投与なし
- 第57病日（2024/6/27） pVAS：5（図3）  
2日前にステロイド点耳を1回（飼い主自宅）  
→過去と比較しても速やかに紅斑軽減がみられた  
ロキベトマブ30mg→その後速やかにpVAS：2まで減少
- 第91病日（2024/7/31） pVAS：5  
前回同様、飼い主自宅にて1回のみステロイド点耳  
→すぐに良化。前回のロキベトマブ以降3週間で悪化するためロキベトマブ30mg追加投与
- 第120病日（2024/8/29） pVAS：5  
ロキベトマブによる痒み減少は3週間、4週目に悪化  
pVAS：5の割には耳の紅斑は軽度  
→ロキベトマブ30mg追加投与
- 第148病日（2024/9/26） pVAS：4  
秋に入り、耳と四肢の症状軽減  
ロキベトマブ40mg追加投与（体重増加により増量）
- 第188病日（2024/11/5） pVAS：4  
飼い主が満足できるQOLを維持できていたためロキベトマブの追加投与なし。スキントピックのみで維持  
→2024年12月9日あたりから飼い主都合でスキントピックの給与なし
- 第253病日（2025/1/9） pVAS：5  
1ヵ月間スキントピックを食べておらず痒みが悪化  
→スキントピック再給与、ロキベトマブの追加投与なし
- 第295病日（2025/2/20） pVAS：5（図4）  
スキントピック継続するも、悪化した痒みが戻らずロキ



図1 2024/5/2



図2 2024/5/30



図3 2024/6/27



図4 2025/2/20

ベトマブ40mg追加投与、モメタゾンフランカルボン酸エステル含有持続型点耳薬を両耳に点耳

### フードの使用感

スキントピックは食いつきがよかったので継続することができた。もう少し粒の大きいものもあると幅広く活用できそうである。

### 本症例のポイント

#### 症例の選択は重要である

本症例は、痒みを主徴とし初診時前後1ヵ月のpVASが7~8を示すも、皮疹は両耳と四肢に局限し、紅斑は軽度~中程度であった。また、厳密な除去食試験は実施されていないものの季節性を示す左右対称性慢性湿疹を示す病歴をもち、感染症の関与が低く、ステロイドにもよく反応することから、CADを第一に疑うと評価した。これは、Favrotの診断基準(Hansel, P, 2015)とも矛盾しない。

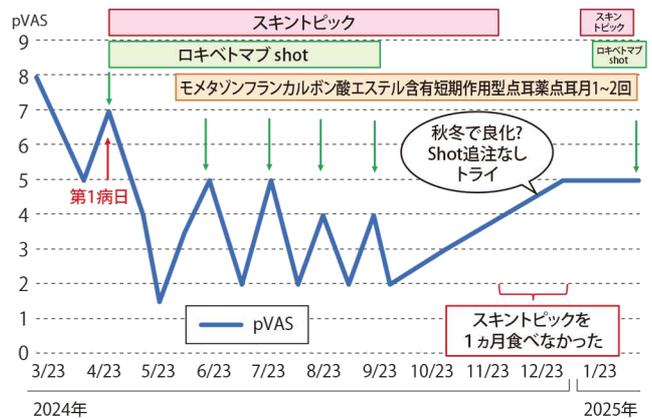
また、飼い主が減薬(できれば休薬)を望み、できる限り副作用の少ない治療方法を希望した。よって、①皮疹は軽度~中程度、②食物アレルギーの関与がきわめて低いCAD、③減薬を希望した飼い主にスキントピックが導入された。

#### CADの治療維持期にてpVAS減少と減薬の維持が可能か

本症例では、CAD治療の導入期にてプレドニゾロン0.5~1mg/kg SID 7日間と30kg以上のゴールデン・レトリバーであるにもかかわらず、ロキベトマブ30mg(0.9mg/kg)で導入した。スキントピック導入前は、ロキベトマブ投与後約2週間ほどで痒みがみられ、最終的にはpVAS:7まで悪化した。しかし、スキントピックを導入して1ヵ月経過すると、ロキベトマブを投与して4週間まで効果が持続し、4週間を超えて生じた痒みは最大でpVAS:5に留まった。また、以前は外耳炎の紅斑はステロイド点耳薬にて消退するのに7日間ほどかかったが、スキントピックを導入して2~3ヵ月後より、(CADの重症化しやすい夏季にもかかわらず)わずかに1~2回/月の使用で両耳の紅斑が消退するようになった。また、秋季に入り季節性に改善傾向を得たことは否定できないが、明らかにロキベトマブの投与量は減少した。

2022年にWatsonらは、導入1ヵ月後でも(有意な差はみられなかったが)、やや改善傾向(modest itch improvement)がみられ、導入3ヵ月後にコントロール群と比較して有意に痒みが改善したと報告している。また、減薬については、3ヵ月で投薬量が減少しはじめ、6ヵ月

図5 経過



適切な除去食試験済みのCAD (とくにAOが強調される症例)

病勢が軽度~中程度

維持期での管理をサポート(3~9ヵ月間 継続必要)

減薬を主な目的としたい(例:ロキベトマブ追注期間延長)

とくにロキベトマブ、オクラシチニブ(SID)、プロアクティブ治療で耳の症状の緩和が今ひとつ

紅斑と痒みを出にくくしたい

表1 スキントピックの使いどころ

および9ヵ月でスキントピック介入前と比較して有意に減少したとしている。これは、本症例報告の結果とも大きく矛盾していないと推察している。

紅斑については、色調自体は最終的に軽度~中程度まで戻ってしまうため、痒みと投薬量の減少ほどの手応えは感じなかったが、外用薬投与後の紅斑の引きやすさは主観的には明らかであった。

#### スキントピックは維持期での使用で有効に変更

本症例は、偶然にも12月初頭から1ヵ月ほどスキントピックを給与しておらず、皮疹が再燃し、スキントピックのみで加療したが、冬季であるにもかかわらず紅斑や痒みの改善はなく、むしろ悪化傾向を示した。このことから、導入期と維持期においては、維持期で使用するほうが食事療法よさを活かすことができると推察される。

### おわりに

スキントピックを併用し減薬が可能となったCADの犬について報告した。そこで推察されるスキントピックの使いどころを表1にて示した。これは、症例報告と過去の文献を参照して得られた知見であるため、今後は情報や症例をさらに集積して、再現性や安全性について再評価していく必要があると考えている。